

# 享和2 (1802) 年の淀川点野切れについて ——とくに「享和二年七月淀川洪水絵図」の製作時期と水害の長期化について——

木谷 幹一\*

## I. はじめに

史上最大の淀川水害は享和2 (1802) 年の淀川<sup>しめの</sup>点野切れ (以下本水害と呼ぶ) と推定されている。これは京都府木津川市加茂での氾濫実績から推定した洪水流量 (2.2 万 m<sup>3</sup>/秒) を根拠としている。また本水害は台風と梅雨前線の組み合わせによる豪雨のみであり、高潮の発生はなかったと推定されている<sup>1)</sup>。

本水害に関する史料については、大坂心斎橋の扇子商、小橋屋宇兵衛による「榎並八箇洪水記 (大阪府立中之島図書館蔵)」<sup>2)</sup> という色彩画 35 枚と説明文からなる絵本が当時象徴的な水害だったのであろう、本水害の翌年享和3 (1803) 年に発刊されている。この絵本の発行意図は不明であるが、この絵本には被害現場と避難行動、被災者救済活動、水防および復旧作業などが詳細に記録されていて、貴重な絵本である。そのほか各地の地方史料が市史等編纂時に多数翻刻されている<sup>3)</sup>。しかし管見の限り、各種史料に基づく研究成果は寛政12 (1800) 年から文化2 (1805) 年にかけての各村の年貢量の比較から水損規模を比較した内田 (2000) の研究<sup>4)</sup>にとどまる。その理由は推定の域を出ないが、おそらく系統的な史料整理が未進展なのであろう。当然淀川史上最大の水害になった直接の原因、つまり本水害の長期化についても管見の限りでは注目されていない。

さて筆者はすでに延宝2 (1674) 年の淀川仁和寺切れについて復元的研究<sup>5)</sup>を試行した。その研究では仁和寺村の切れ所付近の地形分類を行い、破堤箇所が文禄堤築堤以前の淀川流路跡であったこと、砂などの破堤堆積物が平安時代以前から築堤されていた横堤によって田畑へ拡散防止されていたことを指摘、同時に自然地理学の立場で水害をアーカイブすることに重要性を再確認している。よって史上最大の淀川水害である本水害をアーカイブすることに重要性を感じた。

さらに高槻市立しろあと歴史館には、戦国時代から近代までの文書、摂津国島上郡柱本村葉間家文書<sup>6)</sup>が寄託されている。その中に享和2年7月の淀川洪水絵図が4葉 (以下150番、151番、152番、163番と呼ぶ) 存在していて、すべて「享和2年の淀川点野切れ」の水留普請に関する絵図 (写真1、写真2) であった。

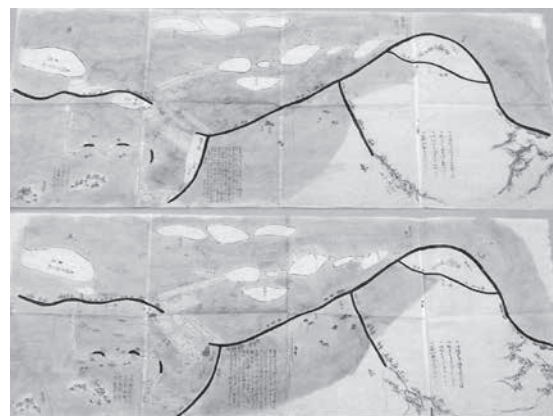


写真1 150番の絵図 (上) 151番の絵図 (下)

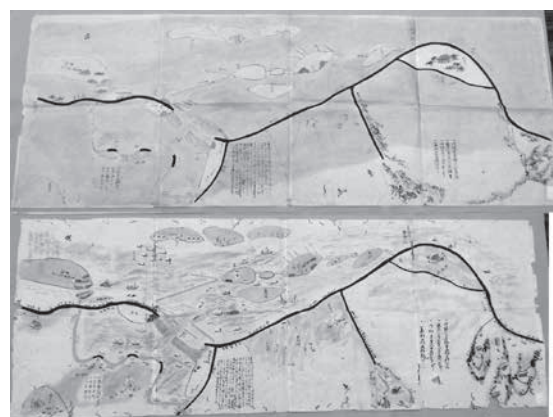


写真2 152番の絵図 (上) 163番の絵図 (下)

それぞれのベースは同じ絵図であるが、それぞれの絵図を比較すると堤内地の浸水域が異なることや水留普請作業が異なっていることがわかった。さらに平安時代以前から築堤されていた横堤<sup>7)</sup>も破堤していたこともわかった。さらに絵図には4葉とも同じ説明文が記されていて、そこには「享和二壬戌七月朔日七つ頃に切れ同五日御見分有同六日より杭打ち始る同晦日に堰留押し切れ

\* 大阪市立古市小学校

八月中頃切所深さ六丈六尺床より二三尺に浅くなり八月十九日より内堰杭入九月四日より洗堰土俵入始め但し杭は間に五本づつ幅二間に三通り打ち同十一日より下の流作より土砂持始め川表よりハ数百艘の五合船にて土砂入る八日嶋より附洲より萱包み土俵数千切所上手より入れ次第に浅くなり同月十三日に明け方に碎五つ入同十五日碎八つ入都合十三入同十七日より夕五つ時首尾よく御堰留七十七日め也（筆者読み下し）」と書かれていて、寝屋川市葛原の上堀家文書のひとつ上堀直勝による「享和二年壬戌七月點野村切所一件留」<sup>8)</sup>を集約したかのような文である。

そこで史上最大の淀川水害と言われた「享和2年淀川点野切れ」のアーカイブを行い、これらの絵図の水留普請の進捗から、それぞれの絵図の作成時期などの推定を行ってみた。同時に最大の水害となった原因、つまり水害の長期化についても考えてみた。

## Ⅱ. 享和2年の淀川点野切れとは

本水害は、大阪歴史博物館蔵の「享和貳年淀川洪水々損村改正繪図」では、水損郷村数237ヶ村、総高11万7,050石4斗2合、堤防決壊43箇所、決壊した堤の総延長1,611間とある<sup>9)</sup>。

現在の北河内および中河内地区（大阪市東部、守口市、

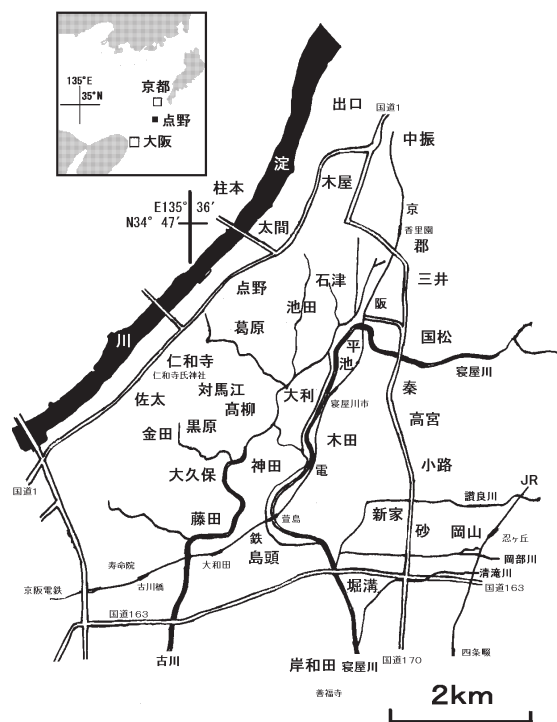


図1 地域概観図

門真市、寝屋川市、大東市、東大阪市）などの低地で長期間にわたる浸水が起こって、12万石に近い被害を出したことがわかる<sup>9)</sup>。図1に地域概観図を示す。享保20(1735)年淀川三矢切れもほぼ同じ範囲で浸水被害が起こり、5万石の被害だった<sup>10)</sup>ので、その2倍以上の規模といえる。

さて本水害での国役堤の切所は、淀川右岸の廣瀬村で1箇所40間、高濱村で6箇所144間、上牧村で1箇所30間、前島村で8箇所330間、冠村で4箇所240間、大塚村大塚町2箇所130間、淀川左岸の楠葉村で5箇所94間、上島村下島村宇山村立会堤で3箇所69間、点野村で1箇所130間、仁和寺村で2箇所150間とある。中津川右岸の野里村で1箇所40間、神崎川右岸の申村で2箇所60間、福村で1箇所38間、中津川左岸の野田新家村で2箇所38間、六軒屋村で1箇所10間、九条村で2箇所38間、野田村1箇所30間とある<sup>11)</sup>。

また浸水期間は葉間家絵図の説明文および寝屋川市葛原の上堀家文書のひとつ、上堀直勝による「享和二年壬戌七月點野村切所一件留」<sup>12)</sup>では77日であったと記されている。

なお上堀家文書には2つの本水害に関する記録史料が見つかった。

ひとつは先に示した上堀直勝による「享和二年壬戌七月點野村切所一件留」<sup>12)</sup>で、これは点野村切れ所修復普請に関する記録である。普請記録の部分のみを抽出して表1を作成した。補足として茨木勝之による「享和二壬戌年大洪水私記」<sup>13)</sup>、門真三番村享和三年亥正月十五日付けの篠山十兵衛あての「野口家文書」<sup>14)</sup>、小橋屋宇兵衛による「榎並八箇洪水記」<sup>15)</sup>などの史料も利用した。

もうひとつは大利村の茨木勝之による「享和二壬戌年大洪水私記」である<sup>16)</sup>。これは寝屋川市大利村（現大利元町）に住んでいた茨木勝之による私記で、それによると6月29日に風雨が激しくなって、枚方市牧野の上島村から京都市淀まで高潮によって淀川が逆流していた。7月1日に仁和寺村と点野村の国役堤が破堤した。仁和寺村の切れ所の修復は7月中旬には完了したが、点野村切れ所の修復現場では7月26日に切れ所に打設した杭がゆるみ、土俵が流出した。さらに8月1日16時から18時にかけて地震が起こり、8月6日ごろに再度台風が来襲し、切れ所が拡大した。その後普請方法の変更によって、9月20日に修復が完了したことが記録されている。

### Ⅲ．摂津国島上郡柱本村葉間家文書「享和二年七月の淀川洪水絵図」について

以下4葉の絵図について説明を行う。絵図に示された範囲はおおよそ図2のABCDの範囲である。

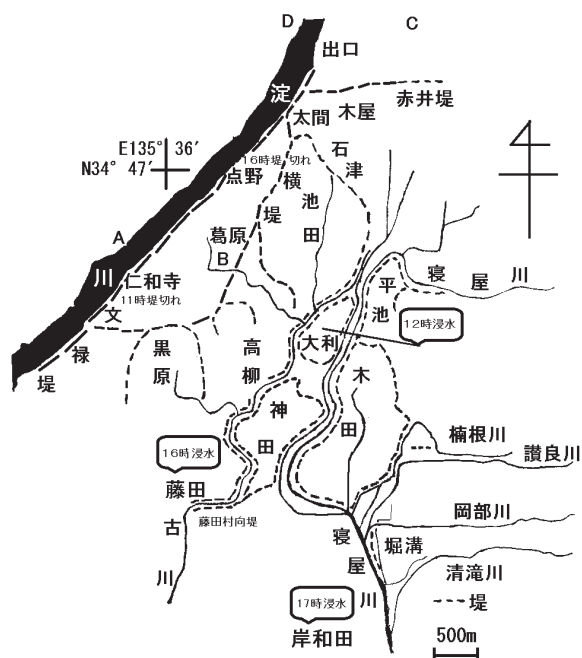


図2 破堤・水先到達時刻および囲堤等分布図

#### 1. 150 番の絵図

絵図は枚方市枚方元町の万年山から寝屋川市仁和寺までの間である。これはすべての絵図で共通している。

点野の切れ所より上流の中洲間に杭を打ち、中州から水刳杭を出し、点野の切れ所周辺の水勢を弱め、切れ所の水留普請がスムーズに進捗するように工夫がなされている。これはすべての絵図で共通する（写真1上：150番、写真1下151番、写真2上：152番、写真2下：163番）。

土俵置き場は点野切れ所の兩岸の堤防や附州に見える（写真3）。

点野切れ所上流では杭1列に対し、下流では杭2列となっている。切れ所前にも水刳杭があり、5列見られる。

点野切れ所堤内には船23艘が見える。浸水した住家の屋根が12軒見え、点野村や葛原村の神社も見える。堤防上の住家も8軒見える（写真3）。

堤内には杭を3列打設した所と土俵が配置された所があって、切れ所を「遠回し」<sup>17)</sup>にして水留の堤普請がされている（写真3）。



写真3 150 番の絵図（部分）

東から大久保庄長さ二十間、門真庄長さ三十間、上庄長さ三十間、友呂岐長さ三十間、御手先長さ八十六間、九ヶ庄長さ百式間、八ヶ庄長さ百八十一間、九ヶ庄長さ十八間、八ヶ庄長さ三十一間、大庭庄長さ三十七間、榎並庄長さ二十四間、九ヶ庄長さ二十間、榎並庄長さ八十間、五ヶ庄長さ七十八間、榎並庄長さ三十間と記しており、淀川左岸の村々に国役普請を命じたことがわかる。

杭を打設した所と土俵を配置した所は、木谷（2014）の地形分類<sup>18)</sup>では、前者は文禄堤によって淀川の河道が固定される以前、自然堤防などの微高地に相当し、後者は旧河道や破堤流路跡（地元では<sup>ふち</sup>とされている）などの凹地に相当する。微地形に合わせて工法を変えているところが興味深い。

#### 2. 151 番の絵図

点野切れ所前の水刳杭列は5列見られる。

土俵は点野切れ所の兩岸の堤防や附州のみで見られる。附洲（八日島）での浸水が見られる（写真4）。

点野切れ所堤内には船11艘が見え、浸水した住家の屋根が15軒見え、点野村や葛原村の神社も見える。堤防上の住家も11軒となり150番より水が減っているこ



写真4 151 番の絵図（部分）



とがわかる。点野切れ所下流の流作場（点野村外島のことであろう）への連絡橋が見られる（写真4）。

### 3. 152 番の絵図

土俵は淀川の中洲や点野切れ所の両岸の堤防や附州に見える。

点野切れ所前の水勿杭が3列見られる。

点野切れ所の堤内には船2艘が見え、浸水した住家の屋根が6軒見える。堤防上の住家も4軒見える（写真5）。150番および151番より浸水域が広いことがわかる。

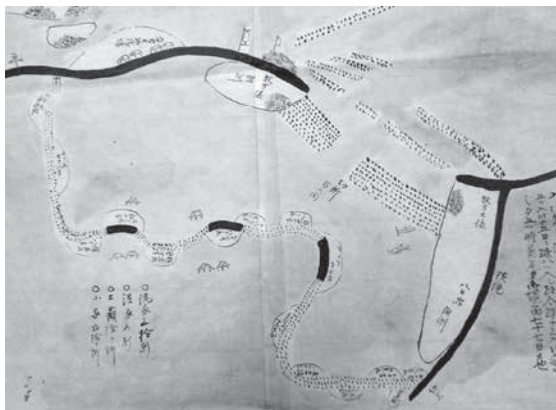


写真5 152 番の絵図（部分）

### 4. 163 番の絵図

点野切れ所下流では水勿杭が5列見られる。

土俵は淀川の中洲や点野切れ所の両岸の堤防や附州に見える。

点野切れ所付近に石杵普請船が見える。

点野切れ所堤内には船6艘が見え、浸水した住家の屋根が22軒見え、点野村や葛原村の神社も見える。堤防上の住家も15軒となり150から152番より水が減ったことがわかる。点野切れ所下流の中洲への連絡橋があり、中洲には土俵が見え、土俵置き場となっている（写真6）。

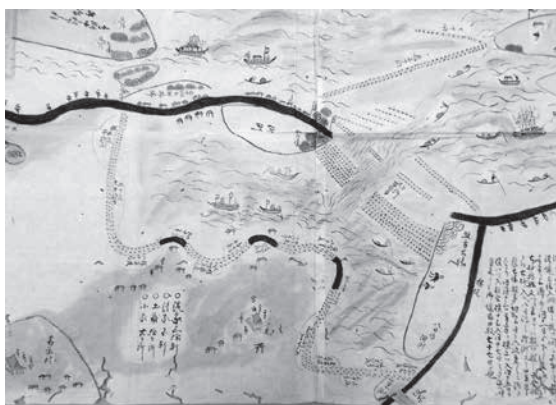


写真6 163 番の絵図（部分）

点野切れ所の上方には五合船9艘が停泊していて、中州に川方奉行の陣屋（御川方）が見える（写真7）。修復普請が本格化してきたことがわかる。

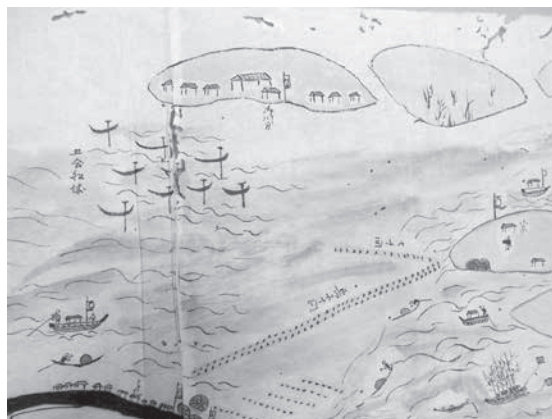


写真7 163 番の絵図（部分）

ほかに枚方市光善寺周辺の国役堤と東海道堤の間（写真8の中上）ならびに赤井川上流（写真8の左下）が浸水している。

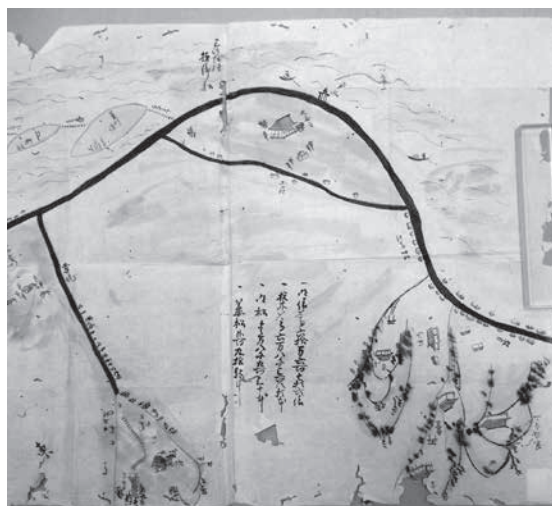


写真8 163 番の絵図（部分）

### 5. 4葉の絵図の製作時期

離水して現れた家屋数から152、150、151、163の順で浸水域や水かさが減じていることが推定できる。

つまりその順で水留普請が進捗しているのであろう。表1をもとにして4葉との絵図の製作時期を推定する。

152番の絵図では土俵が淀川の中洲や点野切れ所の両岸の堤防や附州に見えることから9月11日ごろであろう。

151番の絵図では点野村外島への連絡橋が見られることから、これも9月11日ごろであろう。

163番の絵図では石杵普請船がみられることから、9月12日から13日の間もしくは15日と考えられる。

以上から推定して、享和2年9月11日ごろの絵図3葉と9月12日から13日もしくは15日の絵図1葉であると推定される。

#### Ⅳ．本水害に関する記録史料

本水害に関する記録史料としてⅡで掲出した以下の2点を記録史料として紹介する。なお本文中、(中略)とした部分は水害と直接関連がないと筆者が判断して割愛した部分である。

##### 1. 上堀直勝の「享和二年壬戌七月點野村切所一件留」

「前略七月朔日四つ時前に淀川一丈四五尺位の大洪水摂河の堤二三尺づつ水越候、(中略)、仁和寺村へ九つ時

に切れ込み、(中略)、堤の用水樋の邊り危く相成杭木土俵は申すに及ばず米麥疊等を運び防ぎ候へ共時節の事やら人力に及ばず終に七つ頃に切込、(中略)、切所長百六間七月五日に御代官御見分有り、同六日より御手代出勤御手先人足にて杭打初、(中略)、同月二十八九日頃迄に杭打揃え土俵也大抵に出来、(中略)、三十日未明より切所、(中略)、水中に土俵を程よく納め前後より段々せき寄せ今は八九間斗りに相成候処何分水勢強く数本杭木のり流れ候打込候土俵も皆々流れ、(中略)、依之御代官様初め数多の人足もあくみはて詮方なく両方へ引退き其日堰留も休みに相成候。八月二日より折々ゆふだち四五六七日東風吹き五日の処晝後より少々づつ水増候故、(中略)、両度の水にて切所も段々深く堀毎日切所深さ御

表1 水留普請等の経時変化記録

	水留普請記録	その他の記録
6月25日～6月27日		伊勢湾を通過する台風による豪雨
6月29日		淀川左岸を通過する台風による豪雨、寺社などで被害、寝屋川洪水、枚方市牧野村上島あたりから京都市淀に向かって淀川逆流（高潮の発生）
6月30日	淀川の水位が上昇し、昼夜太鼓鐘で警告。堤上に土俵を配置	
7月1日	仁和寺村、点野村で堤切れ	大利村は寝屋川国役堤に避難
7月3日		堤方奉行篠山十兵衛らが飯味噌塩水などを被害地域に配布、以降9月上旬まで
7月5日	仁和寺村、点野村の切れ所を堤方奉行篠山十兵衛らが見分	7日という記録あり
7月6日	切れ所の最大深さおよそ11.5m	8日という記録あり
7月6日	切れ所の修復普請着工	8日という記録あり
～7月20日	仁和寺村切れ所修復完了	
7月20日	点野村切れ所仮修復完了	
7月25日	点野村切れ所で、とくに深く切れたところがあって土俵を投入開始	
7月26日	土俵の投入を完了したが、土俵の流出を抑える杭がゆるんで、土俵が流出	土俵計20万俵投入
8月1日		地震発生
8月1日～8月7日	この間普請中断	
8月6日～8月7日		台風通過
8月7日	点野村切れ所拡大	
8月中旬	切れ所の最大深さおよそ20.5m	
8月中旬	堤方奉行篠山十兵衛から新たな設計図書が到着。 ①点野村切れ所堤外、枚方市出口の淀川堤から寝屋川市太間の中洲、点野村切れ所下流の淀川堤まで水刳杭を設けて、点野切れ所を囲み、水の勢いを弱める ②点野村切れ所には堰を設ける ③点野村切れ所より堤内では遠回しに築堤を行い、切れ所修復と点野村南部への浸水緩和を行う。	
8月19日	杭打ち開始、点野村切れ所上手から土砂投入	
8月25日～8月26日	切れ所の最大深さおよそ8.3m	
9月2日	浸水深著しく低下する	
9月4日	遠回しに築堤着工、淀川左岸の村が分担して普請を行う。	
9月8日	石枠（立方体の本枠の中に石を入れたもの）組立作業開始	
9月11日	昼夜兼行で切れ所へちまき土俵2,000斗投入、五合船二合半船にて切れ所上手より土砂投入、点野村外島から切れ所へ砂を運搬	
9月12日～9月13日	切れ所へ石枠5つ投入	
9月15日	切れ所へ石枠8つ投入	
9月17日	土俵投入完了	土俵計50万俵投入
9月19日	切れ所仮修復完了	
9月20日	堤の修復開始	

改、(中略)、八月中旬には六丈六尺に相成、切れ口後の水にて廣さ凡三十間計り杭木悉く拔出流れ右に付御堰留も彼是延引相成追々御評議の上、遠回の思召、八月十九日より杭打初め九月二日三日篠山十兵衛様御手代大原彦九郎様遠回の水積り被成候処淀川二百五十間向の土俵致候島より切所迄の水の高低四尺一寸又切所より百六十間計り下字野芻邊の遠回し迄の高低二尺一寸と承り候」とある。

表1の点野切れ普請記録と重なる部分については一部省略するが、7月1日午前11時ごろに仁和寺で堤切れが起こり、点野では用水樋あたりが危険な状態だったので何らかの対策を講じていたが、午後16時ごろに堤切れが起こった。点野で7月5日に代官による見分が行われ、翌日から復旧工事がはじまり28日か29日にはある程度復旧したものの、30日に仕上げにかかったが、土俵が流出した。8月4日から7日まで風雨、点野の切れ所がさらに深くなり8月中旬には切れ幅も拡大した。切れ所を遠まわしに修復する工法に変更、8月19日より杭打ちが始まったことがわかる。

さらに「一、九月四日より遠回し土俵入初る、尤も杭打人足は御手先竝水下庄内へ被仰付候。一、大久保庄長二十間、門真庄長三十間、上庄へ長三十間、友呂岐長三十間御手先へ長八十六間、九ヶ庄長さ百四十一間半但し三ヶ所、八ヶ庄長さ二百十二間但し二ヶ所大庭庄長三十七間榎並庄長百三十六間但し三ヶ所五ヶ庄長さ七十八間、右之内難所は八十六間は御手先人足竝寺島人足杭打、(中略)、遠回し長七百間餘りの間一番から九番迄割合、(中略)、杭打土俵入候、(中略)、杭木土俵土砂を五合船にて運びかかり提燈明松にて萬燈の如く右に付御出役人替る替る昼夜御見廻被成候故村役人も七夜の間は枕を傾けず昼夜かけ廻り候。(中略)、一、九月十一日より点野村外島より切所へ昼夜共砂持初る、(中略)、一、其頃切所へちまき土俵凡そ二千斗入是は土俵へ萱をゆい付土砂留の爲め切所へ御入被成候淀川表は数百艘の五合船並に二合半船にて切所の上手より毎日毎日土砂流し同月十二日頃に杵五つ入れ同十五日に杵八つ入れ都合十三入同十七日夜五つ時分に御堰留御成就被爲成下候七十七日なり一、石杵と申すは高一間に横幅二間四方図の如く四方の柱生松の八九寸角扱ふち底は細き松木の如く枝葉等に藤にてからみ細藤にて纏付杵一つ重ね二百貫目宛と承り候、(中略)、右のちまき土俵は大原彦九郎様御差図と申す事に候」とある。前章で「遠回し」普請について

は、絵図から淀川左岸の村に堤内地の普請を申しつけていたことがすでに確認されている。

堤外地には船によって昼夜兼行で砂を入れ、切れ所に土俵や石杵とよぶ土俵の流失を防止する木杵をつくって普請を行うなど、大規模な工事であったことがわかる。「榎並八箇洪水記」<sup>19)</sup>にも石杵の施工の様子や枚方市東山の土を船で運搬して、切れ所周辺で土俵を作り、大量の土俵を杭の間に置いている作業風景が描かれている。

さらに「一、明俵諸方より積登り候惣メ高六十萬六千六十七俵、(中略)、一、杭木總メ高六萬八千三百八十本、(中略)、一、明松メ一萬八千八百八十本、(中略)、一、かがり松三百八十四駄斗、(以下略)」とある。

「延宝2年の仁和寺切れ」のときは篠山藩青山家文書絵図<sup>20)</sup>に「式百拾九本杭木上下切口根杭老間に三本打、八拾三本ひかえ木上下切口遣壺間壺通、百七拾束志〇み竹、三百六拾四本椎木切口ノ内拾三間ノ所〇打拾四通、四拾式本上下切口〇〇木、〇〇石六百六拾坪ハ蛇かご〇〇九百四拾裏表砂留遣、土俵九万俵但壺間四方につき四百八俵」とある。

土俵や杭などの才数を見比べるだけでも、「享和2年の点野切れ」での才数の多さが突出していることがわかる。

## 2. 大利村の茨木勝之「享和二壬戌年大洪水私記」

「六月廿七日暮合より小雨降出し、(中略)、之に依って廿八日雨悦び一日休日仕候處、同日七つ時より風雨頗りに相催し、同晩八つの頃より次第に烈しく、翌廿九日終日東風雨相止まず、(中略)、大水にて上嶋渡り所水面淀へ打越し、(中略)、七月朔日朝、(中略)、四つ半に仁和寺堤切申し家四軒流れ申し候、当村へは九つ時に仁和寺切れの水先が来り」とある。

6月28日午後16時ごろから風雨となり、29日午前1時ごろに暴風雨となった。高潮によって枚方市牧野の上島村の淀川の水が京都市淀まで遡上していた。榎並八箇洪水記<sup>21)</sup>では6月28日に大阪市の生国魂神社では暴風雨で石鳥居の笠木が折れたと記録されている。おそらく暴風雨の原因は台風であろう。門真市の寿命院や寝屋川市の仁和寺神社で大破したこと<sup>22)</sup>が記録されている。6月29日午前1時ごろに暴風雨とあるので、台風によってそれらの社寺が大破したのであろう。また生国魂神社と寝屋川市仁和寺とは直線距離で12km程度であるので、移動速度が遅い台風だったかもしれない。



寝屋川市東方の京都府精華町では6月25日から東風が強かったこと、27日には暴風雨となったこと、さらに28日夕方から29日も暴風雨であったことも記録されている<sup>23)</sup>。

門真市巢本の松本氏所蔵古地図には「享和二年六月廿七日未刻ノ勢州すずか山大風にて大石をふきあげ七月朔日まで大雨ふる」<sup>24)</sup>と記録されている。6月25日から6月27日昼にかけて伊勢湾を北上していた台風もあったとも考えられる。

これらから、おそらく6月25日に伊勢湾を通過していた台風と6月29日には大阪市を直撃した台風によって、大阪市や門真市、寝屋川市で風害が発生していて、7月1日午前10時30分ごろに淀川の仁和寺堤が切れ、正午に大利村に水が流入してきたのであろう。

さらに「同日七つ時に亦亦点野堤用水樋相抜け、凡そ間敷百六間計り相切れ、夫故暫時に水増し道場杯も床の上水揚り、(中略)、尤も点野村にて家三拾六軒水流れ申し候」とあり、7月1日午後16時ごろに点野堤の用水樋が破損して、その後200m程度の堤切れが起こり、大利村の道場が床上浸水となった。

まず大利村へは仁和寺切れで水が来たが、点野切れの水で一気に床上浸水したのであろう。

門真三番村の野口氏文書<sup>25)</sup>、享和三亥正月十五日付の堤方奉行篠山十兵衛宛の書状では、「朝五つ時仁和寺村建屋之所々堤九十間余掉切水入、同五つ半時に点野村建屋之所に而堤百六間掉切、(中略)、流失之人家は点野仁和寺村に而は数多有之」とあり、7月1日午前8時ごろに仁和寺村で180m程度堤切れ、午前9時に点野村で200m程度堤切れとあり、仁和寺村および点野村での破堤時間が上堀家文書<sup>26)</sup>と異なる。

水は野口家文書<sup>27)</sup>では「藤田村堤向之堤より、門真庄へ水入朔日昼七つ」、門真市南部の門真市岸和田善福寺過去帳では「当村水先朔日暮れ六つ時来る、五つ時正々来る、夜半に本堂に挙る、二日夕方迄に満水当寺にて九尺4寸座舗の床上3尺」とあり、7月1日午後16時ごろに守口市藤田の南（自分たちが住んでいる門真市域）へ水が来た。午後17時ごろに門真市南部の岸和田まで水が来て、19時ごろに床下浸水、深夜に床上浸水となり、7月2日夕方には寺の床上1mまで浸水したとある。

7月1日の破堤と浸水時刻を図2に示す。

これを見ると、まず11時の仁和寺切れによって、お

そらく水路（悪水路であろう）を通じて1時間後大利村が浸水域となった。4時間後には守口市藤田村の南方が浸水域となった。大利村から藤田村まで4時間かかっていたが、16時ごろの点野切れによって流入水が増し、1時間で門真市岸和田村まで浸水域となったことがわかる。

7月2日以降は「点野村仁和寺村両切所七月八日御見分有之、九日より切留御普請御取掛り、尤仁和寺堤切口両所百四拾間計、点野堤切所百六間計り、堤の笠から床迄三丈五尺と申事に候、追々御普請有之候所、仁和寺堤は一応にて普請成就仕候へ共、点野堤甚だ六ヶ敷、七月廿五日より土俵入かけ候処、廿六日大方入仕舞候処、堤中程深き所廿間計り杭ゆるみ、土俵流れ申し、村方に五寸計りも水へり候処、又々右土俵流れ候故、水五六寸も増し申し候」とある。

7月8日に切れ所の幕府役人による見分があって、7月9日から切れ所の修復普請が始まった。切れ所深さは12m弱程度であった。

仁和寺の切れ所修復は大方完了したが、点野の切れ所修復は困難を極めた。7月26日に土俵をほとんど入れ終わったところ、土俵の流出を抑止する杭がゆるみ、土俵が流出して、堤内の水かさが増水したとある。

切れ所深さが堤から12m弱とある。文禄堤の高さがおよそ実測6m程度であったので、地表面より6m弱程度、下方侵食を受けたかのように見える。

そして「同月六日、二百十日、朝より雨降り暮六つより風雨烈しく、夜七つ時より押風吹く、之に依て今晚水五六寸相増し、翌七日九つ時より水次第に相増し、夜半頃水壹尺五六寸相増し、水下村々大に騒ぎ候。右増水に付点野堤下の方へ廿間計り切まし、尤堤笠より水床へ六丈式尺と申し候」とある。8月6日深夜に台風が来て増水、7日点野切れ所が40m程度広がった。切れ所深さは20m程度になった。14m以上も下方侵食を受けたかのようにみえる。

その後、再普請となり、「一此度又々再普請、笹山重兵衛様堤奉行にて御普請の仕方左の如し 先川表太間嶋より点野切所下迄はねがせ式通打こみ、又切所の下にて前乗ぜきと號して上村かやぶちと申所より、点野村の下へ廻し杭木打こみ、凡間敷七百間計り、此杭の間に土俵を入れ、竹柴を入れて水やどらせ、川表より土砂をかき流し段々切所浅く相成、八月廿五六日頃に深さ式丈四五尺に相成、夫より次第に土砂かきながし、九月二日頃に水

餘程へり申候。九月八日より石簍次第に入れ申し、夜人足相掛り十六日に石簍皆入終り、十七日の夜中に至って土俵入終り、先切留出来候て水も荒方に引き申候。併下田等は疇一杯に水有之候へ共追々に水引き、当日廿日に至って水盡引き、堤も追々御普請有之様子に御座候」とある。

「太間嶋より点野切所下迄 はねがせ」、「切所の下にて 前乗ぜき」「上村かやぶちと申所より、点野村の下へ廻し杭木打ちこみ、凡間数七百間計り」など、これらは葉間家文書「享和二年七月の淀川洪水絵図」の中洲間杭打普請、切れ所前の水制列、遠廻しに相当する工事を開始、8月25日もしくは26日に切れ所の深さ8m程度となり、9月2日に浸水深も相当浅くなった。9月8日から石杵投入、徹夜作業で9月16日にすべて投入完了、9月20日には水が引いた。

### 3. 水害の長期化

各文書から、台風が6月下旬には2個ほぼ同時に来襲し、7月下旬から8月上旬にかけて1個来襲していたことがわかった。6月29日には高潮が確認されている。

これらの気象条件は水害を長期化させた原因のひとつであろう。なぜ水留普請に77日もかかったのだろうか。野口家文書<sup>28)</sup>では、それまでの浸水被害は10日か15日程度であったとあるので、77日の浸水期間は非常に長すぎる。

今回詳細にアーカイブする中で、気になる表現として、普請部材のうち土俵が延宝2年の仁和寺切れの約6倍に及ぶことや7月の水留時に打設した杭がゆるんだという記述から、堤切れ場所の地盤について疑問が浮かび上がってきた。

そこで堤切れ場所付近のボーリング資料を確認する。

現在淀川堤防には、堤体の崩壊防止のために鋼板矢板が打設してあって、その事前調査として、国土交通省がボーリング調査を標高6.0mのところで行っている。その調査資料<sup>29)</sup>を参照してみたい。図3に土質柱状図を示す。

点野村切れ所あたりは深度7mまでN値5から15程度の砂、深度7mから17mまでN値0～5の粘土、17mから19mはN値10程度の砂、19mより下位はN値

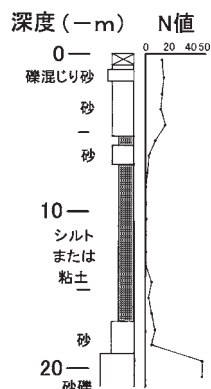


図3 土質柱状図

50以上の砂礫である。とくに深度8～14mにN値0の鋭敏粘土<sup>30)</sup>が連続して見られるのが特徴である。

切れ所深さは8月6日まではおよそ8.5m程度だったが、約20mまで深くなったと記録されている。これはボーリング資料で考えると、鋭敏粘土まで達していたことになる。

また7月26日に杭がゆるんだとあるので、鋭敏粘土地盤に打設していた杭が何らかの衝撃でゆるんだのであろう。そして検尺したところ、鋭敏粘土が6mと厚かったことから20mの深さまで検尺竿が容易に突き刺さったのであろう。同時に鋭敏粘土が6mと厚かったために、堤体支持層としての地盤改良の必要があって、水留普請に非常に時間を要したのであろう。

## V. まとめ

1. 葉間家文書「享和二年七月淀川洪水絵図」の絵図4葉は、享和2年9月11日ごろの普請風景を描いたものが3葉と9月12日から13日もしくは15日の普請風景を描いたものが1葉で、普請進捗を段階的に示されている。

しかしだれの指示で何の目的で普請進捗を絵図に記録したのか不明である。

2. 享和2年の水害時には、台風が6月末にはほぼ2個同時に来襲していた。さらに8月上旬にも台風が1個来襲していたことがわかった。また6月末には淀川流域で高潮も発生していたこともわかった。

今後淀川流域で近世水害を復元する際には、大阪湾沿い以外の地域でも高潮を意識した村方文書の解釈等が必要かもしれない。

3. 点野切れの修復普請は、杭を打設した基礎地盤に鋭敏粘土が厚く堆積していたために、基礎地盤としての役割が果たせず、切れ所の修復に大幅に手間取った。その結果普請が長期化したのであろう。

また近世土木史上、鋭敏粘土地盤での土地改良事例としても貴重な修復普請である。また堤内における遠回り普請は、その後明治18(1885)年の伊加賀切れまで淀川流域では行われていない<sup>31)</sup>。

「享和2年淀川点野切れ」は歴史水害事例としても、土木史上の観点からも興味深い事例といえよう。



## 付記

本研究に当って、高槻市立しろあと歴史館には葉間家文書の閲覧および撮影に際し、適切な対応をして頂いた。

また寝屋川市点野周辺のボーリング資料の閲覧については、国土交通省淀川河川事務所工務第一課にてご指導を頂いた。

記して謝意を申し上げます。

## 注

- 1) 例えば河田恵昭「摂河水損村々改正図」そんぽ予防時報、242、2010、附図と解説文。
- 2) 小橋屋宇兵衛「榎並八箇洪水記」南竹堂、1803。
- 3) 例えば  
寝屋川市誌編纂委員会「寝屋川市誌」、1956、825p。  
寝屋川市誌編纂委員会「寝屋川市誌」、1966、971p。  
寝屋川市史編纂委員会「寝屋川市史」、第4巻、2000、813p。寝屋川市史編纂委員会「寝屋川市史」、第5巻、2001、805p。門真町史編纂委員会「門真町史」、1962、1211p。  
守口市史編纂委員会「守口市史 史料編」、第1巻、1962、638p。
- 4) 内田満「門真市史」、第4巻、2000、385-392。
- 5) 木谷幹一「延宝2年の淀川仁和寺切れを復元する」、兵庫地理、59、2014、39-42。
- 6) 高槻市史編さん委員会編「摂津国島上郡柱本村葉間家文書目録丹波国桑田郡田能村中舎家文書目録」、1971、22-23。
- 7) 注5) に同じ
- 8) 例えば  
淀川左岸水害豫防組合編「淀川左岸水害豫防組合誌」、中編、1929、168-182。  
東光治編「河内九箇荘郷土誌」、九箇荘村役場、1937、246-251。
- 9) 例えば  
淀川左岸水害豫防組合編「淀川左岸水害豫防組合誌」中編附表、1929。  
大阪歴史博物館「特別展 新淀川 100 年水都大阪と淀川」大阪歴史博物館、2010、66。
- 10) 例えば淀川左岸水害豫防組合編「淀川左岸水害豫防組合誌」中編、1929、160。
- 11) 9) に同じ
- 12) 8) に同じ
- 13) 例えば  
東光治編「河内九箇荘郷土誌」、九箇荘村役場、1937、241-246。  
寝屋川市誌編纂委員会「寝屋川市誌」1966、261-262。  
西北地域史編集委員会「寝屋川市西北地域史 鞆呂岐」、寝屋川市西北コミュニティ、1988、120-121。
- 14) 門真町史編纂委員会「門真町史」1962、769-773。現在本史料は関西学院大学図書館に寄贈されている。
- 15) 2) に同じ
- 16) 13) に同じ
- 17) 7) に同じ
- 18) 5) に同じ
- 19) 2) に同じ
- 20) 例えば5) または鳴海邦匡・上田長生・大澤研一「『篠山藩青山家文書』絵図目録：近世前期大坂周辺絵図」、2009、35。
- 21) 2) に同じ
- 22) 例えば「寿命院諸舎興隆寄進録」「三ツ嶋村文書（守口文庫蔵）」：門真市「門真市史」、第4巻、830。  
「文化二年四月十二日付 仁和寺氏神社殿の修復願」東平介家文書：寝屋川市史編纂委員会「寝屋川市史」、第5巻、2001、10-11。
- 23) 「江戸状控 拾番」「森嶋国男家文書」：精華町史編さん委員会「精華町史」、史料篇Ⅱ、1992、15-17。
- 24) 門真町史編纂委員会「門真町史」、1962、777。
- 25) 14) に同じ
- 26) 例えば8) 13)
- 27) 14) に同じ
- 28) 14) に同じ
- 29) 淀川河川事務所資料
- 30) 例えば地盤工学入門編集委員会編「地盤工学入門」社団法人地盤工学会、2000、248 p。土質工学会関西支部・関西地質調査業協会「新編大阪地盤図」、コロナ社、1987、25-26。
- 31) 例えば大阪府編「洪水志」、大阪府、1887、46p。